

インタビュー：野中広務氏にきく

私の「園部時代」

聞き手 庄 司 俊 作

元衆議院議員野中広務氏にインタビューを行ない、生い立ちから青年時代、園部町長として活躍されていた頃の思い出を聞いた。タイトルの「園部時代」というのは、現在も野中氏は園部町の自宅で生活されているので紛らわしいが、園部町長を終え京都府議に出られるまでの期間を指す。インタビューを行なった日は衆議院議院が解散され、にわかにあわたしくなった8月11日の午後、場所は京都駅八条口前の野中事務所であった。インタビューは2時間弱。野中氏は80才であるが、国政の場で活躍されていた頃そのままに非常にお元気である。記憶もしっかりし、次々と昔の知人の名前が出てくるのには驚かされた。質問に的確に答えていただき、インタビューが進むにしたがって尻上がりになり熱を帯び、例の甲高い声で早口に、しかし朗々と話をされた。噂どおり弁も立つと思った。そして、1つひとつの質問に丁寧に応えていただいたことに恐縮した。発言は資料的価値が高いと判断し、ご本人の承諾を得た上で公表することにした。編集に当たっては、見出しを付したことと、必要最小限の訂正なり削除追加をした以外、あまり手を加えていない。資料的価値を考えて、発言のニュアンスを出来るだけ大事にしようと思ったのと、野中氏の名調子を再現したいと考えたからである。なお、校正の際、野中氏にはインタビューの箇所について全て目を通していただいたことを付言する。(庄司)。

農家の長男として生まれて

— 先生は農家の長男ですが、家は継がれていないようですね。

野中 はい。旧制園部中学を出て、鉄道が好きだったのと、せこいことですが鉄道に入ると好きな山登りがただでできると思って大阪鉄道局（1949年以降「大阪鉄道管理局」となる）業務部本局に入りました。鉄道に入ったのは別に高い志があったわけではありません。親父は京都師範、今の京都教育大学ですがそこにやって教師にしたかったようです。

— 小さい頃、農作業の手伝いはされましたか。

野中 母親は、農業にはこの子は向いていないなあと思っていたようです。家には若干山がありまして、その頃はまだ松茸が採れたんです。盗まれないように見張りに行かされたんですが、夜になってもなかなか帰ってこないの、見に行ったら本を読んどってそのまま寝ていたというようなことで、盗まれても分から

ないという暢気なことでした。もちろん農繁期には、苗代の苗まきとか手伝わされましたけど、一向に間に合わんし、鉄道に入ってからそれはそれも日曜日に帰ってきたときくらいでした。大阪に下宿しておりまして、週に1回くらい帰ってきて青年団運動をやったりしておりました。

— お父様は農業をしてもらいたいという希望はなかったですか。

野中 そんな希望は持っていませんでしたね、ええ。弟は結構、農業に熱心でしたし、私は大阪に行ったりしているものですから弟がほとんど手伝っていました。

— 今の園部町長ですか。

野中 そうそう。私が町議になって2期目のとき今の妻と結婚するんですが、結婚する時にお袋に「どうしようか」と相談したら、「あなたは初めから外に住みなさい。百姓も向いてないし、一度この家に長男として入って、それからまた外に出たら親子の折り合いが悪かったので出たというように世間に見られるから、あんたは外に住みなさい。借家でもいいから外に住みなさい」と僕に言うたんです。それで外に住むことにしたんです。それが始まりで、ずっと弟が家を守ってやったものですから、親父が亡くなったとき、私は6人兄弟ですが、5人の弟妹に「俺は財産放棄する」と言いました。大した財産はありませんけれども。親を最後まで看取った者が財産は引き継ぐものだ、山も田んぼも。お袋が活着ているときはね、「あの3つの田んぼはあんたが持ときや。そやなかったら、困るよ、これから食べていかんらんから。食料は安心するようにしておかないといかん。3つはあんたが持ってなさい」と言うたけど、「もう、いい」と言いました。弟には「飯米だけはやれよ」と言っていたらしいです。そういうことで、結局、私は外で暮らすということになって、家は弟がとることになりました。

— ご自分でも農業は向いてないと思われましたか。

野中 はい、向いてないと思っていました。

— あまり農業は好きでなかったんですか。

野中 好きでなかったですね。

— そうですか。当時のことですから、長男であるにもかかわらず、農業をしないと、家族の中で何か反発みたいなものはなかったですか。

野中 家の中はお袋が仕切っていましたから。親父はもう、お袋の言うままでね。ほんとにおとなしい、酒もタバコも肉も食わんというね、親父でした。お袋は結

構しっかりしていて、年は若かったけど、考え方も立派でしたし、ああいう夫婦だったから我々は恵まれて今日まで来られたんだと思っています。

約9年間、大阪鉄道管理局で働く

— 先ほちょっと大阪鉄道管理局に入られたことをお聞きしましたが、どれくらい勤務されましたか。

野中 昭和18年に入って辞めたのは27年ですから、軍隊に行った約半年間は別にして、9年ほど勤務しました。

— どんなお仕事でしたか。

野中 審査課旅客係というところで働いていました。私らの頃は、戦争が激しくなると、車掌、出札改札はほとんど女性の職業でした。とくに審査課は女性が多く、200人くらいおる課でございました。旅客係という出札改札、車掌を審査する職場も80人くらい女性がいました。私は戦争から帰ってくると、若い人がいなくて、私より先輩が外地からまだ帰ってこない。私は比較的早く復員したものですから、結構重要な仕事をするようになりまして、係長も私を引き立ててくれました。教習所が大阪の吹田にあったんですが、新しく国鉄に採用されて車掌や出札改札をやる人は、そこへ行って研修を受けて、それから現場へ出るわけです。戦争から帰って3か月後にその講師になれと言われたんです。

— 講師のことはご本で拝見しました。

野中 それか、自分が人の前でしゃべれるきっかけになったんです。

— 大阪鉄道管理局では、超スピードでご昇進されたようですね。

野中 男子職員の復員が遅かった。だから僕に比較的高いポストをポンポン与えないといけない。戦後の国鉄は、職階級制度でやっている仕事にポストと給料がついてきた。私は旧制中学卒ですから、普通ならよく行って中級課員だった。それが職階級で中級課員から準上級課員、上級課員を飛び越して主席課員まで行った。それはもう後から帰って連中にしたら面白くない。

— 戦争で上の男性が抜けたということですね。

野中 そうそう、彼らが復員してきた頃には、もうポストに座っちゃってたわけです。

— 長いこと鉄道で働かれた意味ということでお聞きします。失礼な言い方になりますが、お許しください。後に町長になられます。そのお仕事ぶりを少し調べ

て思ったのですが、先生は実務能力が非常に高いなあ、これは並みの町長ではない、という印象をもちました。それは鉄道で働かれた経験が大きいのではないかとらんでいるのですが、間違っていますか。

野中 それは大きいです。私はですね、後に自治大臣や官房長官、沖縄開発庁長官など経験させてもらいまして、役所のトップに立ちましたけど、役人にごまかさず、仕事を独自にチェックしてやっていくという能力を与えてくれたのは大阪鉄道局の仕事での経験です。

— 細々した実務の経験ですか。

野中 はい。それから関連していきますと、町長、副知事、こういう理事者と議員を交互に経験した、地方政治を経験したことで、中央で十分働くことができた。竹下さんに「出てこい」と誘われて代議士になったんですが、こう言うんです。「俺はね、早く出て大蔵大臣とかやったけどね、地方政治を知り、地方の苦しみとかを知ったものは誰もおらない。お前は職人だ、年をとったなんて言わんと、やっぱり出てこい。今、お前が出てくるのが必要なんだ」。選挙に出るように口説きましたよ、僕を。

— 話はちょっと飛びましたが、副知事を辞められた後、衆議院の選挙には出るつもりはなかったわけですか。

野中 ああ、なかったんです。僕は「太陽の園」という重度障害者の授産施設を建てていました。副知事を辞めた後、園部に帰ってそれをやろうと思っていたんです。

戦 争 体 験

— 軍隊に半年行かれますが、今度『文藝春秋』ですか、雑誌に思い出を書かれているようですね。高知で自決をしようと思ったとか、大西少尉ですか上官のことを。まだ雑誌は拝見していませんが、大西少尉のことをどういうふうに書いておられるんですか。

野中 私たちは高知でね、8月17日に戦争が終わったことを知ったんです。それも泊まっていた民家ででした。糧秣をとりに行った帰りがけに、懐かしさに「お茶でも呼ばれよう」と思って寄ったんです。おばあちゃんが「兵隊さん、寛いだですね」と言うんです。「何を寛いだ?」、「知らんのですか?」、「エッ?」、「広島、長崎にデッカイ爆弾が落ちて天皇陛下が戦争をやめられたんですよ」、

「ヘェーッ」という感じでした。驚きました。幹部候補生で張り切っている最中でしたからね。

— 玉音放送は聴かれなかったのですか。

野中 もちろん。幹部は知ったかもしれませんが、言いませんでした。だから、我々は本土決戦に備えて戦いをやろうと考えていました。そこで終戦の知らせです。帰ってきた仲間と「米軍が上陸してくる」と話しました。土佐湾だからね。「必ず殺される。同じ死ぬなら、早く死のう」と言って桂浜に行き、決行しようとしたら、大西少尉がバーッと来て、私は腰を蹴りあげられ、殴られて座られました。「お前たち、バカか。死ぬほど勇気があるんなら、こんな間違った戦争を起こした東条英機を、まず殺してこい。それから死んだって遅くない。それで命がながらえたら、この国のために働け」と言われた。我に返って、少尉に「帰れ」と言われたもんだから、こもごもに帰ってきたということなんです。この少尉は信念のある方で、私たちが幹部候補生になった時、我々を集めまして「お前たち、戦陣訓を持っているだろう。出せ」と命令しました。競って出したですよ。それから「積み」と。ガソリンを持ってきてバンとやるわけです。「軍人は軍人に賜った軍人勅語があるのに東条英機がこんな戦陣訓なるものをつくることで、日本の国を誤らしたんだ。お前たちはそういうものを持つもんじゃない」と言うて。「ああ、骨っぽい人だな」と思ったんです、その時に。だからまあ、この人のおかげでその後もあったわけで、あちらこちら探して歩いたんです、でも、見つかりませんでした。

ところが、去年、「波瀾万丈」という日本テレビの番組をやりまして、その話をしたんです。そしたら、大西少尉の甥ごさんがたまたまこのテレビを見ていて、「うちの叔父が兵隊から帰ってきた当座、食事をしながら『戦争が終わった時、腹切って死ぬというバカヤローがおったのを俺が張り倒して、それぞれを郷里に帰らせたけど、あいつら今頃どうしているかな』と数回聞いたことかある」と思い出したらしい。その中の1人がここに出ているんだということで、テレビ局にすぐ連絡がありました。私もすぐ大西家と甥ごさんに連絡しまして、「ぜひお参りに行かせてください」とお願いしました。ちょうど10月23日の台風で荒れた直後でした。「今は荒れていて、とても来ていただく状態ではないので」ということで、そのときは叶わなかったのですが、この5月8日にやっとお墓参りをさせてもらいました。四国の愛媛県の人なんです。四国の人だと

思わなかったので、はじめから福岡県とか先入観があったので福岡県ばかり探していたんです。息子さんのお名前を聞いたら、長男も次男も大西少尉の人柄を物語るような名前がつけてありました。そんな人でした。おかげで私も、ずっと60年間肩の重荷になってきた荷物を下ろせたという気持ちです。

— 本当に桂浜で自決を考えられたわけですか。

野中 考えたんですよ。アホかと思われるかもしれませんが、そんな時の感情はわからないと思います。もう張り切ってね、「国家のために死のう」と思ってましたから。それが挫折して、「もう捕虜になるか死ぬかどっちかだ。自分たちでやろう」と思ってね。本当にそういう気持ちだったんです。

— 東条憎しという気持ちですか。

野中 そうですね。だから今だにその気持ちは残ってますね。

— それから京都に帰ってこられるのですね。先生の戦争体験は、後の政治家としての生き方にどう影響していますか。

野中 当時は天皇陛下のために一身を捧げるのが男子の本懐だと思っていました。それほど当時の教育とか、マスコミを含めて、ナショナリズムは異常なものがあつたんです。その頃と今はよく似ていますよ。そういう方向に行こうとしている。

— 戦争体験者として、昨今の状況に対して危惧をもつということですか。

野中 そうそう。

— しばらく京都で寝泊まりされた後、郷里に帰られますが、京都はどんな状況でしたか。

野中 京都駅に着いた時は8月20日ですよ。17日に終戦を知って、3日後に京都に着いています。「お前は大阪鉄道局だから輸送業務がある。早く帰れ」と帰らされた。駅に着いたら、昼なのに浮浪者がバーッと寝ている。いっぱい寝ているんです。それを見て愕然としました。「これはひょっとしたら」と思った。汽車で大阪の焼け跡を眺めながら帰りました。ダーッと寝ている。単に夏だから皆が寝ているという感じじゃないんですね。ほんとに浮浪者が寝ている。「これはちょっと異常な状態だな。ひょっとしたらこの国は革命が起きるかもしれない」、「しばらくこの国の様子を見てるのが面白いかな」と思いました。血の気があつたんですね、その頃は。

— 革命の予感というのはありましたか。

野中 なんか「世の中が変わる」という感じがしました。

— それはいろんな人に聴いても、皆さん、そうおっしゃいますね。敗戦直後の世相というのは、私らにはちょっと想像しにくいのですが。

野中 そういふね。ともかく駅前の異常な様子から、澎湃としたものを感じた。だから1週間帰らんと友だちのところを泊まり歩いて、最後は絵かきさんの息子さんの家に行ったんですよ。私と同じ部隊に行っていましたから。お母さんに「元気になっておりましたか。もう帰っているでしょう」と尋ねると、お母さんが僕自身が元気であることを確認されて、涙流して喜んで、自分の息子が帰ってきたように喜ばれました。だから私はそれを見て、「ああ、うちのお袋も帰ったら、これだけ喜ぶのかな」とちょっと里心がついたんです。それで家に帰ったんです。そしたら、お袋に怒られましてね。「あんた京都に戻ったというのになんだ、何してたんだ」と。その間に、東条英機を殺そうとしていた連中から、何人やったか知りませんが、手紙が来ていた。それを親父が隠していた。それを私は知らずじまいだったんですよ。これは今、心残りですよ。知っておればね、私も宮城前で腹切ったんじゃないですかね。「親父が隠しておったばかりに俺は行けなかった」といふ、そういう心残りがあります。

— それは同じ部隊の方ですか。

野中 同じ部隊の5人のうちの1人です。

— そういうことをやろう、と。

野中 訪ねていった時には、もう、そういうことで。「死んだかはわかりません」と言われました。昭和20年9月には、彼は死んでいました。心に残ることの1つです。

— 同じ部隊の幹部候補生の5人ですか。

野中 そうそう。

— それはどこにも書かれていませんね。

野中 ええ。そうすると、「それは誰だ」となりますしね。その時のことを面白おかしくされても、亡き人に気の毒なので。

青年団運動に加わって

— 終戦後、日本国憲法、農地改革、公職追放とかがあって世の中が大きく変わります。どんな感じを持たれましたか。

野中 「新しい国づくりが始まったな」という感じはしました。我々は地域おこしということを考えました。青年団に結集することによって、地域に元気を与えていくということで地域青年団を始めました。文化活動で芝居をやったり、村人を集めて討論会をやったり、盆踊りをやったり、いろんなことをやりましたよ。

— どういう動機で青年団活動を始めたんですか。

野中 地域に同じくらいの連中がおるわけだから、一緒にやったんです。だけど、僕は大阪に行っているから、たまにしか入りませんでしたけど。模擬町会とかをやったりして、結構。

— 青年団活動は政治色がありましたか。

野中 京都の青年団は共産党が主導権を持っていました。それが爆発したのは昭和26年です。昭和26年4月に町会議員になって間もなくの6月頃、宇治の兎道小学校で京都連合青年団の大会があったんです。

— 連合青年団の役員を「丹頂鶴」と批判されますね、大会で。その大会は26年ですか。27年5月と思ったんですが。

野中 26年です。バッヂをつけて間なしでした。

— 連合青年団の役員たちと肌合いが違ったわけですね。

野中 壇上の来賓は皆、共産党です。

— 野中さんは共産党の方針は受け入れがたい、と。

野中 それは国鉄において2・1ストも経験していますし、その時の経験を通して共産党は絶対だめだという頭でずっと来ていましたから。

— 京都は強いんですよ、共産党の影響力が。

野中 強かったです。青年団は共産党一色です。そこで「おかしいじゃないか」という意見を言いだしたから、皆びっくりしたと思いますよ。

— 京都青年協議会をつくれるのは？

野中 それは後です。昭和27年です。その時に、「そら、そうだ」と言うたのが京都市の青年団のリーダー何人かと、長岡京とか木津、舞鶴、福知山とかの青年団のリーダーでした。こういう連中が一斉に「そうだ」という声を挙げだしたんです。

— その中心になられたということですね。

野中 それから「会合をもとう」ということでやりだしました。そして「このまま

ではおかしくなるのじゃないか。まともなものをつくろう」ということになって青年協議会をつくりました。

— 具体的な対立点は何ですか。反共とか？

野中 反共というよりも、向こうで言うたのを覚えています、「富士山を登るのには、山梨側から登るのも静岡から登るのもある。青年期はいろんな道を登って行って、最後に自分たちの人生を知るんだ」と。はじめから共産党ありきというね、運動の進め方は地域青年団の正統性にならないのだから、地域青年団のやり方とは違う、というのがその時の論点でしたね。それに共鳴した連中が主になって分裂したんです。

— 京都の青年団は選挙になれば共産党の候補を支持するという話になるわけですか。

野中 そういうことは具体的にはありませんでした。

— 連合青年団の方から攻撃されたでしょうね。

野中 電柱に「分裂者・野中広務を葬れ」というビラを貼られたりしました。

町議，町長になる

— 昭和26年4月に町会議員になられますが、30年5月に副議長、32年5月に議長になられますね。超スピードです。最近は年功序列でそんな例はないと思いますけど、何か理由があったのですか。

野中 園部町は旧園部町と摩気村と西本梅村が合併してできるんですが、この時に合併協議会をつくります。議会が中心になって理事者とね。合併協議会で話をするのは、僕らが結構慣れていた。「園部はおかしい。園部には我々では理解できない赤字がある」と摩気村の仲さんという人が指摘したんですよ。私は「合併するのに園部の財政を中途半端に隠したままでやるのはいけない」という立場をとっとりました。町長は旧園部町から、議長は摩気村から出すことになっていたのですが、そういうことで私も旧園部町ですが副議長は「お前がやれ」ということになりました。これが合併の最初だったんです。

— そうですか、合併の際の申し合わせがあったわけですか。

野中 人事話ですな、議会の中の。結果としてそうなっただけです。

— それにしても30歳ですよ、若すぎませんか。

野中 若かったですよ。

— 年配の方が多いですよね、町会議員は。

野中 若いのもあったけど。私と同じ年のが共産党にいました。

— 先生みたいな町議は普通ですか、特別ですか。

野中 ほとんどは地域のボスが出てきたんです。

— 33年11月の町長選の時には、30人の町議のうち28人が先生の陣営についたといわれていますが、本当ですか。

野中 はい。共産党ともう1人を除いてね。

— ちょっと信じ難いことですね。

野中 初代の町長は、園部の西田長四郎さんという金持ちの郵便局長だった。2代目が摩氣の出身だけど、町会議長をしていた西田多四郎さんでした。この人らが1年ちょっとで、皆変わってしまった。病気で、3年でもたないようになった。だから、「今度は歳が若いのでやれ。お前がやれ」と言うて、議会が薦めてくれた。共産党とか、変わった者は除いてね。2人だけを除いて、他は皆、私を推してくれました。

— 社会党の議員は？

野中 社会党系はありましたね。

— その方も先生に？

野中 これもついてくれました。

— 当時の町長は町の名士がなっていたんですか。

野中 そうそう。それにしても面白い現象なんです、初めから。

— 先生の前二人の町長は？

野中 さっきも言ったように、名門ばかりです、ええ。

— それで赤字を積み重ねた、と。

野中 いやいや、そうではないですけど。なんか宴会政治が常識化していて、合併前に宴会政治のツケを料理屋においたまま隠したりしていました。昭和28年の災害の応急工事の仕事を隠したまま、銀行から借金をする。正規の起債ではなく、隠れ借金です。仲さんという摩氣の議長が指摘したことは正しかったんです。

— 「園部町革新同盟」というのは、ご記憶にありますか

野中 いや、覚えてないな。

— 財政が大変なことを隠して、先生が協議会で、それを正して町長が辞職をされ

ますね。

野中 それは辞職じゃないですよ。リコールになった。

— リコールですか。その前に辞職を迫ったんですね、町長に。それでリコールになって、その時に革新同盟が？

野中 リコールしたら解散になったんです。

— 解散になったんですか。町長が辞職したということではなかったんですか。

野中 それは合併前ですよ。

— 先生が町議になって2年目ですね、昭和28年です。

野中 町長の不信任を出したんですよ。

— それで副議長が調停に入って話をまとめるということではなかったですか。

野中 それは違います。町長が解散したんです。

— 解散したんですか。その時に革新同盟はできなかったんですか。

野中 それは知りません。

— そんなことが書かれた本があったんですが、違いますか。

野中 僕の覚えでは、そうです。

— 最初の町長選では町民にどういことを訴えられましたか。

野中 合併間なしの町を「清新な町にしましょう」という訴え方をしました。中学の校長を半年前までやっていた野間さんという人が社会党推薦で立候補して厳しい選挙になりました。約500票差でした。

— そうですね。町長選には無所属で出られましたね。その前には、町会議員をしながら衆議院議員の田中好の秘書をやっておられますね。

野中 秘書なんてやってないんです。これはね、僕が生まれた城南町、その時は大村とってたんですが、これが片方は部落ではない。片方は未解放部落でした。同じ字の中でね。私が青年団をやっていて考えたのは、田中さんの選挙から協力してあげなければ、同じ在所でね、2つに分かれている、それはね、そもそも対立しているのは間違いだと思っていました。我々は、年寄りから「お前らが何を言うたってあかん。わしら百姓で手伝いに行った時も、縁の下においてあった食器を出して飯を食わされたんだ。そういう差別を受けたんだ」と聞かされてましたよ。それで、この大きな選挙を、こちら側から手伝いについてやらなければ、地元で諍いやっているようなことではだめだということで、僕は手伝ったんです。

— 田中さんの秘書ではなかったんですか。

野中 秘書はやっていません。秘書に近いことはやってます。僕が町会議員になったとき、田中さんが選挙違反に引っかかりました。この処理もブタ箱通いも全部僕がやりました。検事に、「正直に言えば帰してやるが、正直に言わないと今夜泊まってもらう」と怒られました。そういうので秘書に近い仕事をやっていました。しかし秘書ではなかった。田中さんの娘婿が読売新聞の国鉄担当で、ジャパン・トラベルサービスという国鉄の構内営業の会社をやっていました。私は国鉄を辞めてから、そこの大阪営業所長ということで飯を食べていました。町会議員は年俸1,000円ですから、それだけでは飯なんか食えません。

— 自民党に入られたのは、昭和42年ですか。

野中 はい、42年です。昭和30年の自民党結党以前は、民主党の京都府連青年部の副部長でした。

— 民主党の党籍は持っておられた。自由民主党になってからは？

野中 自民党には入らなかったんです。

— そして昭和42年に入ったのですか。

野中 あとは町長になりましたからね。

— ひつこいようですが、町会議員だけでは食えなかったから、国鉄を辞められた後も別のサラリーマン生活を続けたというのは本当ですか。

野中 そうそう。

— 「園部町政だより」が、先生が町会議長になった直後から出されますね。あれは先生の発案ですか。

野中 いや、僕が発案したわけじゃない。

— 先生は「園部町政だより」の第1号に挨拶の文章を書かれていますね。

野中 あ、それは議長になる時ですね。

— 「町民の側に立った町政」というタイトルの文章ですが、「私は貧農の家に生まれ、現在も借家住まいの安サラリーマンであり、年齢は議員中の最年少である。こういう自分が議長になって町の政治をめぐる文化が変わるのではないか。庶民の目線に立った政治をする」という意味の文章です。これはご記憶にございますか。

野中 そのようなことを書いたような気がします。生意気なことを書いてますな。「町政だより」でしたか、「議会だより」ですか。

— 「町政だより」ですね。当時の気持ちはどういうものでしたか。思い返していただく？

野中 自分を飾らずに、自分の生まれたところに帰ってやろうと思いました。大阪で仕事をしていて人に負けんほどのポストについていたが、自分が採用した同じ町の人間に「あれは部落の出身だよ」と言われました。「野中さんは大阪で飛ぶ鳥を落とす勢いで仕事をやってあんなポストを得ているけど、あの人は地元へ帰ったら部落の人や」と言うているのを堀越しに聞いたんですよ。縁故採用して、僕の課に入れた人間にです。僕が採用して、下宿に泊ませたりした。「俺は旧制中学しかいけなかった。皆と競争し、戦後の重い仕事を与えられたから、夜間の学校に行くにも行けなかった。だから、お前たちは、俺がちゃんとするから、お前は関西大学の2部へ行け」と言うて、行かせた男ですからね。それこそ飯盒で飯を炊いてね。それが、こういう話をしたんですから、愕然としたですよ。僕は隠そうとも思わないし、言い振らそうとも思わなかった。淡々として仕事をしていた。なのに、手塩にかけた男が「こんなことを何で言うんだ」という気持ちでカーッとなった。それから5日間くらい、下宿でのたうち回ったですね。そして、ようやく出した結論が、「俺はいくら大阪で頑張ってもやったってだめだ。地元にはそういう因習が残り、地元の中にそういう差別をされる事象が残っているとしたら、これは真っ直ぐ地元に戻るべきだ。今のよう中途半端に地元の青年団と、大阪鉄道局で、ある程度いいコースを歩む道と両方かけてはいかん。俺を知ってくれ、どこの出身だと知ってくれた人のところに帰って、そこから出直して、そこから自分を知ってくれたところで生き上がっていこう」というものでした。僕は解放同盟とも全解連とも喧嘩しました。「お前たちは部落を売り物にするな、食べ物にするな。俺だってそうだ。真面目に仕事をやって真面目に取り組んでも差別されたら、その時は立ち上がれ。そんなものを利権の温床にしたり、そういうことをやるのは間違いだ」という信念で来ましたから、それだけに真面目にやろうという気持ちで、50年の政治生活を貫いてきたと思っています。

— 議長になって、地方名士が牛耳っている、そうした町政に対して何か批判的な思いはありましたか。

野中 それはあったでしょうね。旧町時代は町長がね、大きな建設業者の家に行くと、そこに建設業者がずらっと並んでいて、町長が「これだけ仕事があります」

と言うと、親分が「お前やれ」ということでやっていたという話を聞いてね、僕は徹底して怒ったことがある。

— なかなか正義感が強いですね。

野中 私は公立の幼稚園を卒業したんです。幼稚園を出て小学校に入ったら、不思議なことに幼稚園を卒業した者は、小学校から入った者のクラスと混合せずに別々のクラスだった。男女共学で、二組ともずっと同じ先生で6年生まで持ち上がった。奇異なクラス編成でした。そこから旧制中学に行くんですね。旧制中学に行った2つの組は同級会をやれるんです。だけど、小学校の時の同級会は今だに幼稚園組と小学校組とに分かれちゃってやれないんです。「残っているのが少ないからやろうよ」と言ったって、幼稚園に行かなかった組の方が「やらない」と言ってやれません。私は関係ないんじゃないかと思うんですが、不思議なこともあるもんです。我々の時代の教育のすばらしさと恐ろしさを考えていますけどね。

— ご自分は幼稚園に行って、小学校に入って旧制中学に行った。しかし、当時は幼稚園に行ける人たちは少なかった。そういう人たちに対する何か特別の感情はありますか。

野中 それはありますね。彼らから見たら許しがたい、何かエリート意識があったんでしょうな。今だに彼らは「一緒にやろう」と言わないから。

— 先生は大正14年のお生まれですね。同じ世代の方から、貧しくて弁当持ってこない子がいたとか、修学旅行に行けない人がいたとかを聞いたことがあります。そんなことに矛盾を感じる人も少なくなかったようですが、先生もそうですか。

野中 そうそう。

蜷川虎三、田中角栄らとの関係

— 「園部町政だより」の第9号、昭和34年3月に出されたものですが、「蜷川知事が初めて園部町を公式に訪問した」という記事がでかでかと載っています。その後、「園部町政だより」に年初、知事の挨拶が町長や町会議長のそれと並んで毎年載るようになるんですが、これは先生が町長になってから変えられたんですか。

野中 それは府下全町です。京都府から送ってくるんです。「町政だより」に「掲載される場合は知事の挨拶はこれです」と送ってくるんです。今でも続いている

るんじゃないかな。僕が町長になったからではない。

— 蛭川さんとのつながりができて、それで載るようになったのではないかと思ったんですが、間違いですか。

野中 そうじゃない。それは違います。

— 当時、「これまでの園部町長は京都府と距離をとっていた。野中町長になって、いい関係になった」という一般的な見方がありましたが、これは事実ですか。

野中 事実でしょう。その頃の蛭川さんはアイデアに富んだ、ユニークないい政策をやりましたから、僕は惚れ惚れした。地方自治に情熱を持つ人として、蛭川さんの初期はね。10年ほどたってましたけど、地方自治振興資金とか地方自治振興資金とか、市町村がやるのにやりやすいように、国から補助金を受けられないものに府が出すとか、いろんなことをやりました。そういうのには私は心服していました。それは自治省から来た総務部長とか地方課長がやっていたことですけどね。地方課長とか総務部長は友だちの仲で、死んだ人もおりますけど、今だに付き合いをしています。

— 蛭川府政の地方自治に対する姿勢を評価している、と。

野中 評価しています。これは誰がやったというより、蛭川さんの力であって、だから評価しています。

— ひつこいようですが、先生が町長になるまではあまり密接な関係ではなかった。そこで、先生が京都府とのつながりをつけるために積極的に動かされた、と。

野中 そういうこともあったでしょうね。町長になる前に、議員をやったり、副議長やったり、議長やったりして、京都府とは直接接触がありました。京都府の課長、部長、知事を含めてそういう点では、他のポッと出た町長よりは親密度が違いました。

— 同じ頃に田中角栄さんともお知り合いになっていますね。昭和34年ですか。

野中 いや、昭和32年。これは議員の時ですわ。園部郵便局を建て替えてほしいということで、会ったのが初めです。田中角栄さんが郵政大臣になった時です。

— 蛭川さんと田中さんは革新と保守ということになりますけど、矛盾はなかったですか。

野中 そらあ、あんた、自分の町をようしようという気持だったですからね。利用するとか、誰に上手するとかではなしに、手伝ってもらえるところは手伝ってもらおうということです。

— 田中角栄さんの評価をお聞かせください。

野中 角栄さんはね、人の名前をよく覚えている。役人の卒業年次をよく覚えておってね、これは竹下登先生も同じです。ポンポン出てきて、陳情に行くと、そこでサインをする。「これ、どこどこの大臣官房に送れ」とやるんです。「これは見習わないといかん」と教えられたことがあったんです。

— 地方の政治を預かる立場から見ると、どうなりますか。

野中 地方の土臭さということを本当に理解してくれる政治家は、田中角栄、竹下登だったなと思います。

— 地方に対して配慮があった、と。

野中 ええ、痛みを知っている。地方の実情を知り尽くしている。

— 現在、そういう政治家は少なくなりましたか。

野中 おりません、ほとんど。

— 歴史的産物ということですかね。

野中 二世、三世になっちゃった。お父さんは地方の出身だけれども、お父さんが東京に住まいを持って、あの頃は東京に家を持ちますからね。そこで生まれて、東京の中学に行き、高校に行き、大学に行って、お父さんが死んだらお父さんの地盤を継いで出るという政治家ばかりですからね、ほとんどが。

— 先生はどうですか。

野中 国会議員になっても、私は東京に家を持たないことを決めておりました。それが基本です。毎回帰って地域の皆に触れ合うことを政治信条にしなければいけないと思ってきました。

— 田中さんの姿勢を見て？

野中 ええ、田中さん、竹下さんを見て。

— お二人は東京に家を構えたわけですね。

野中 それと、僕はパーティが大嫌いで、いっぺんもやらなかった。

— お二人もですか？

野中 あの人は寄ってきたんですわ。一度竹下さんはやりました。

上手に補助金をとる

— これも「園部町政だより」の記事ですが、当時の園部町取材していた新聞記者の対談記事があります。そこでは、野中町政が高く評価されています。「府

や国から補助金をとってくるのがとりわけうまい。その秘密はどこにあるか」などと語っているんです。秘訣は何ですか。補助金は、町長が変わればとってこれたり、これなかったりするんですか。

野中 蜷川府政はそうでした。僕は町長を辞めるまで、蜷川さんと対立はしなかった。僕は最後の段階で蜷川府政と決別したんです。41年の選挙です。はじめは推薦してたんですが、途中で僕は「嫌だ」ということになったんです。

— 何か個人的な事件があったのですか。

野中 京都府で自動車取得税ができて、それを府議会が議決して自治省に出したんです。自治省は県の議会が出してきたら事務的にしないとイケない。ところが、自治大臣が「今は選挙の時だからだめだ。こんなふうには許可を出したら蜷川の陣営に味方をするようになるから、そういうことはやらない」と聞いてくれない。大臣がそういう判断をして決裁されないから、「野中なら全国の副会長をやっているし、自治省とは切っても切れない仲だから、野中に頼むよりしょうがないじゃないか」と当時の自治省の永野税務局長が京都府の総務部長に言うわけですね。総務部長の山田君が僕に「頼むから東京に行ってくれ」と頼んできた。僕は行くんですが、京都駅で西尾という府会議員と会った。当時、京都新聞が社運を賭けて蜷川打倒の運動をしていた。笹井慈朗という、後に京都新聞の常務になった男が、すべてキャンペーンの記事を「お前に任せる」と社長に言われて「野中京都府町村会長が東京に行った」という記事を書いたんです。東京に着いたら、町村会事務局長は「えらいことです」と慌てていた。「何言ってるんだ」と言うと、「自治大臣は都合がつかないから、とにかく明日赤坂プリンスホテルで朝飯を食おう」ということになった。しかし、京都から晩に「君はそれをほっといて帰ってくれ」と何回か連絡が入りました。最後、蜷川知事の秘書課長から「明日、お会いになったら京都府の車を差し回しますから羽田まで走ってください。羽田で飛行機で伊丹まで飛んで、伊丹で京都府の車を待たせておくから、亀岡に行ってください。そこで蜷川さんが街宣車で待っておりますので、その車に乗って先生の身の証を立ててください」と言ってきた。「もういっぺん言うてみる」。だってね。「俺はね、腐っても公選で選ばれた町長だ。身の証を立てるとはどういうことだ。一役所の課長が、そういうことを言うのか」と怒ってやった。帰ってきて役員を招集して「こういうことで辞める」と言うて辞めたんです。

— そのことは本に書かれていますね。まだ40歳にもならないのに、京都府の町村会長になられましたよね。何か理由があったのですか。

野中 労働組合と交渉する奴がおらへんのですわ。皆、倒れてしまって。

— 当時の労働組合は激しかったのではないですか。

野中 当時の町村長は庄屋とか酒屋の旦那とか、そんなばっかりです。町の有力者が自分の家には男の子が3人いるが、1人くらい継がせて、給料は安くともええからと町村長に頼んで役場に入れてもらう。そういうのが労働組合に入って鉢巻き巻いてね、座り込みして「給料上げろ」とやっている。そんなバカなことやってられるかいというのが町村長でした。

— それもご本に書かれていますね。話を戻すと、蜷川府政が自分のところに来る町村長に対してはお金を出す、そうでない人は出さない、というのを承知の上で懐に入っていったということになりますか。

野中 今でも覚えているのは、いつだったか、久御山町の沢野町長が激しい争いで当選した時のことです。これが学校の給食室を建てるという公約をしました。彼は保守系です。当時の総務部長が「蜷川府政に忠誠を誓うと一札書け。京都府の振興資金を出してやるから」と言ったというのです。僕は町村長会の事務局にいて「バカなことはやめておけ。俺は今から行って言うてくる」と言ってやったんですが、「やめてくれ。俺はこの金が借りられなかったら困る」と言うんです。これが強烈でしたね。そういうのを見てきたから、京都府の職員は公選の重みを知らないと思った。「ここは決断すべき時だ」と思った。「京都府には京都府という自治はあるけど、市町村には自治はない。俺が黙って帰って、明日、車に乗ったら、うまくおさまるかもしれないけど、しかしそれで公選で選ばれたのが、役人に屈伏した歴史をつくることになる。これだけは俺はやめよう」と思って帰ってきたんです。

— 蜷川さん個人というより、当時の府の職員の体制がそうになっていたということですか。京都府とうまくやって、上手に補助金をもらってくるというのは、そういうことだったんですか。

野中 僕は役人とマージャンばかりしていた。酒を飲ませてね。

— そうすると機嫌がいいわけですか。

野中 俺のところにつけておく。そんなばっかりです。

— 本当に、マージャンして仲良くしていれば金がついてくる、と。

野中 そうはムキムキには言わなかったけど、そういう関係で役人とは親しい人間関係をつくったんです。

— どのレベルの職員とうまくやるんですか。

野中 管理職です。

— 京都府との関係というのは、昭和30年代はまだそういうのがあったんですね、ちょっと驚きです。

野中 京都府からは出向の課長をもらってね、組織的なこともやりました。

— 出向ですか。

野中 交流人事ですよ。

— 町長時代に確か、産業課長が京都府から来ていますね。

野中 3人来ました。

— そうするとお金が増えるわけですか。

野中 そんなことはないけども、役場の職員が刺激を受けるんです。さすがに京都府では選んで園部に出向させる。中には「組合を強くしようと思って、こいつ寄越した」というのがおりますやろ。そやけど、それなりの人物を送ってきました。地元の職員が「うかうかしておれん」という刺激を受ける。

— 積極的な面ですよ。

野中 職員と親しくなる、それを生かしてくれる。総務部長のレベルアップは僕1人がやったわけではなく、交流人事を通じてやれたわけです。

— 後のことになりますが、林田府政の時に副知事になります。町長としての経験から、府のあり方、市町村に対する府の姿勢を見直すというお考えにはなりませんでしたが。府の市町村に対する不合理な支配とかですね。

野中 府会議員になった時から、京都府の闇専従の問題を強くやりました。同和行政のあり方を強くついて、批判してきた。「俺は部落の出身だ。だけどね、飴をやったら物事を言うこときくようなね、そんな行政はやめてくれ」と強く言った。建設行政で働いている土方に蜷川さんは京都府が3千万、4千万円とかの砂利撒きの仕事をやったりしました。うちの町でもそうでした。僕は文句を言うた。「あんたは経済学の専門家なのに、労働者に企業をやらせるなんて、どういうことなんだ」と文句を言いました。知事は「お前たちは文句を言われるようなことをして何してたんだ」と職員に怒っていました。

野中町政について

— 昭和30年代は高度成長が始まって池田内閣が成立するわけですが、その中、町長として、財政の健全化をやる一方で、道路や橋、水道、統合中学校の建設などさまざまな社会資本の整備および開発のための施策を次々に実行されました。産業振興も農業の振興を中心に積極的にやられてますね。

野中 工業立地もやりました。

— これらは野中町政の最大の功績だと思いますが、同時に、弱者への配慮を忘れていないことも注目されます。そうした先生の姿勢をあらわす文章を「園部町政だより」に見つけました。そこには、「経済の成長は喜ばしい。しかし、その谷間に落ち込んだ農民、中小企業の人たちに対する配慮も忘れてはいけぬ。経済成長の負の側面を考えないといけぬ」という趣旨のことが書かれています。地方行政を担っていると、こういう意識になるのかなとあらためてちょっと驚いたんですが、そういうことで具体的にはどういうことをされましたか。

野中 バックボーンを持って町に帰ってきたわけですからね。そういう感覚で町政をやってきました。そういう中で、地方の本当の苦しいところに力点をおいてやろうと思っていました。その代わり、未解放部落の道路を舗装するときでも、同時に一般の道も舗装する。部落の道だけを舗装したら、「なんであそこだけ?」、「部落やから?」ということになる。そういうことをやっても、何にもならない。同時に、一緒にやるということを強く心がけました。

— 公平性ということですね。

野中 ええ、公平性。特異性を目立たさない。そういうことを細かく配慮しながらやりました。私は「スクーター町長」と言われました。ラビット号でね、行き来する。これが自転車だったらちょっと人に呼び止められて、降りて挨拶して、話が長びく。自動車は我々の時代には馴染まない。スクーターなら「ヤア」と言ってパーッと走っていけるんです。

— 町長時代には、町の財政をみると、産業振興の予算がずいぶん増えていますね。財政の建て直しをしなければならない時に、投資的な予算を増やすということは並大抵のことではなかったと思いますが。

野中 それは鉄道局の時の経験です。ものを立案し、計画し、やっていく役所ですから、そこで培ったノウハウは生涯を通じて大きかったです。町長という実践

部隊に入って、そこで私自身が議会で、こ生意気に言うてきたことを実践して
いこうという責任感をもっていました。

— 農業振興ではどういうことに重点をおかれましたか。当時の農業基本法で自立
経営とか共同経営とかがさかんにいわれました。

野中 新農村建設計画とかね。生活改善が大きかったですね、僕の時は。

— 生活改善は具体的にはどういうことですか。

野中 台所改善とかです。

— 水道もその一環ですよ。

野中 ええ、水道も。貯水路に水道がなくて、当時、何回かアンケートをとっても
反対が多く、歴代の町長はやっていなかった。僕は議会でアンケートもなしに
やることを決断しました。そのとき、国道工事が始まりました。考えてみたら、
舗装されてから水道管の大きいのを入れると当時で6,000万円です。こんなバ
カなことはない、と舗装されるまでに9号線の中心に水道管を入れたんです。
議会が怒ってね。「水源地も決まらないのに水道管を入れてどうするんだ」と
いうことです。「私が責任をもちます」と言ってやりました。新町のところに
その時は水源池があったんですが、案の定、井戸を掘ったら水は出なかったん
です。しょうがないから掘り下げて園部川に水門を入れて、川の底の水をくみ
上げました。今は変わりましたがね、水源地は。

— 水道も生活改善ということですか。婦人の労働軽減ですか。

野中 婦人会の人を集めて、「アストリンゼンでね、きれいにしてもあかん。飲み
水からきれいにしないといけない。体も含めてきれいにならなきゃいけない」
と話をした。婦人会はいち早く協力してくれました。

— 住民とのパイプについては、どういうことを考えられましたか。

野中 町政説明会をやりました。それと、議会を無視しないで、議会を重視してや
るということですね。その議員さんがおられる地域に1つずつ仕事をやる。4
年間に1つは何かの仕事をやる。そうでないとその人は出てきた意味がない。
そういうことを議員をしていただだけに考えていた。それで事業が地域に隈なく、
均一になる。私の人生を振り返って、ちょっとくらい自慢できるのは、それだ
と思いますよ。

— 公共事業のやり方では、何か気をつけたことがありますか。

野中 それまで公共事業の発注が不透明だった。私は昭和33年に町長になって、34

年に大水害があった。その時に私が役場の人間に言うたのは、「杭とトラックと縄を持って、応急工事の手伝いにきた業者から仕事をやってくれ」ということです。大手の業者は「生意気な、今まで町の仕事は俺らがやっていたのに」と怒りました。しかし、緊急の災害の時に助けにきた人が商売熱心なんだから、仕事をやれというのは間違っていない。新聞配達も、とってくれと言ってきて、とる。牛乳配達もそうだ。土建業者だけが偉そうにね、「俺のところ仕事を連れてこい」と言う。それがうちの大きな業者の崩壊につながった。その人からは憎まれましたけど。

— うちの業者というのは？

野中 園部町のトップ業者。その人たちが引っ張っていた。そうやなしに、小さい業者にも仕事を与える。夜中に災害が起きたようなとき、杭と人夫と縄を持って「何か手伝うことかあったら言うてください」と真っ先に駆けつけた業者から、仕事をしてもらう。

— 大きな地元の業者は仕事がなくなったということですか。

野中 ご機嫌をとらない。

— それは政治的にはマイナスにならないですか。

野中 マイナスやったけど、仕方がない。そういう人からは、最後まで私は憎まれた。

— 具体的には町のどこの業者になりますか。差し障りがなければ。

野中 木崎。

— 木崎の土建業者の？

野中 親分。

— 親分連中とはうまくいかなかったですか。

野中 いかなかったですね。その後、僕になってから、そこの人夫頭が業者の名義出して自分たちの仕事をとるようになってきたから、親分が今度は子分と喧嘩する。

— 面白い話ですね。そうですか、僕なんか木崎の土建業者とうまくやったんじゃないかと思ってました。

野中 一番憎まれた。「あのがキ、殺したれ」と。

— 他に印象に残る事業は何がありますか。

野中 広域行政です。昭和34年から、し尿処理とゴミ処理を広域行政でやろうとし

たんですが、37年からできた。これは、私にある程度アドバイスをしてくれる人がおりました。厚生省の環境部長です。「39年のオリンピックが済んだら環境問題はやかましくなって、ゴミとし尿の問題が出てきますよ。今やったら珍しいから、伊東市以外にはないので我々もできるだけの応援をしますよ。しかし広域でやるべきだ」と言うんです。京都府から来ている保健課長も熱心な男で、「協力します」と言うてやったんです。だから、今も続いているゴミの処理は東京オリンピックの2年前に、すでにできあがってたんです。周辺の亀岡市から、「お前、いらんことをやるから」と怒られましたけど。よその町まで説得しに行きました。「歳の若いのが夢ばかり見て」と言われました。ゴミ屋がゴミ屋で食べていける時期です。まだ都会へし尿をもらいに行ったり、大根とか野菜をお礼に渡して肥タゴでもらってきた時代です。それをね、ゴミを集めて金をとってやろうというんから、「あいつはおかしい」と言われたんですよ。和知町とか瑞穂町の議会に説明に行きました。最後は、そこらの町の人たちも「俺らの町に一銭の負担もかけなければ、あんたの言う通りにする」ということになりました。これも作戦を考えまして、はじめは丹波町につくるということにして、当時の丹波町長に「名乗りを上げろ」と頼みました。最後に落ちつくのは園部と八木の場所です。人口が多いところで集積しないと運送コストが高つくからです。人口が多いのは園部と八木だからね。園部の人は、八木だと思っていた。八木の人は、園部だと思っていた。川の向こうだから印象的に悪いという感じも与えない。タイミングのいい時だからできたんでしょうな。それは、先輩たちが公立南丹病院をつくっていたり、長生園という老人ホームをつくっていたので、広域行政が育つ素地はあったんです。東京オリンピックが済んだら一挙に環境問題が出てきて、万博以後は、し尿とかゴミの問題とか、今は産廃問題とかありますが、そういう点では広域行政として先駆的なことをやれたと思います。こういうことは最初に場所を決めておかないとね。途中で場所を変えたら住民運動で反対があったと思います。そういう点では偉かったなと思います。

— 住民サービスのための役場の窓口統合もありますね。

野中 これは議員の時からずっと考えていたことです。

— そこまで目配りをするのは、さすがに細かいなあという気がします。

野中 主権者である住民を歩かせて、公僕である役場の職員が「ここが済んだらあっ

ち」と60メートルくらい歩かせる。そんなね、主権者を使うのはおかしいと思ったんです。1か所におってもらって、全部中でしてお渡しするところは、待合所を作って1か所にする。お金の受け渡し以外は中です。係が「こっちへ歩け」というのは失礼な話です。これは全国から注目された。見学者も増えました。

— 財政健全化に関してですが、酒をやめたとか、宴会政治をやめたとかといわれますが、それだけじゃないですよ。

野中 取ってくるものは取ってくる。町に料理屋が3軒あったんです。大きいのは350万円借金があった。僕は本になまなましくは書いていませんが、350万円というのは一般会計の1割です。大学ノートに「誰が来て」と書いてある。役場の者が1人おったら皆、役場にツケである。取りっぱぐれがないからです。それで350万円になった。本人にも少しは負担してもらおう。料理屋にも、「あんた方もこんなルーズなことをやってきた責任があるから」と言って、200万円は即金で払いました。その代わりに、「150万円は泣きなさい」と帳消しにした。1年ほどたってから、一番大きな料理屋の親父が言うんです。「町長な、宴会も減った。けど考えてみたら、あんたええことをした。今やから言えるけど、うちの料理屋にかかっていた固定資産税と住民税を料理屋の借金から引いた残りがあれや。上が乱れれば、下が乱れる。税務課の職員が飲みに来たら、『おっさん、俺らの今日の分はあっちにしてくれな』と言うて役場の相殺分にした」と。役所に帰ってきて、役場の課長会で「税務課の職員は胸に手を当てたらわかるだろう。人事で課長にはしない。坊主も課長にしない」と言いました。

— 坊主を課長にするというのは？

野中 坊主の職員は給料が安い。扶養手当もついてない。お寺が昔、戸籍を持っていたという歴史がある。だから、坊さんの職員はほとんど戸籍係におるんです。檀家はあり、寺僧に行くと収益があるから、給料を安くし、扶養手当もつけないというやり方をしていた。「俺はそういうことをしない。一斉に給料は是正してやる。その代わりに、役僧では行くな。よそのお寺の葬式にまで行くな。自分の檀家は、ここには行かんらん。よそのお寺に雇われて葬式に行く、法事に行く、これはやめとけ。それを専門にしている坊さんがいる。役場にも勤められんと、お寺の守だけやっている坊さんもおる。そこへ役場で給料をもらいながら、職員が行ったら面白くないのはあたりまえだ」と言ってやりました。

— 細かいですね。そんなことまで考えるんですか。

野中 「役僧では行くな。その代わり、給料は直してやる。しかし、君らは課長にしない」と言ったんです。1人、怒ったんですよ、私にね。有給休暇の一覧表を持ってきて「私より皆ようけとっている。そんな町長みたいな言い方はない」と。私は、「だけどな、自分のところの檀家に葬式が出た時、課長の方を優先できるか、できないだろうが。だから俺は課長にしたんだ」と言うてね。

— 昭和20年代の役場の職員は給料が低いですよ。細かい町長に反発はなかったですか。

野中 労働組合と交渉したって、「そんなに給料上げてくれと騒ぐなら、よそへ行ってくれ、止めようと思わない。役場に来たい人はようけおるから、不足の人はよそへ行ってくれ」と言いました。

— 役場の職員と仲よくやれましたか。

野中 昼になったら、ちゃんとマージャン台が3、4台おいてある。場所を取り合いしてやっていた。

信 念 な ど

— 先生の信念は「愛のない社会は暗黒であり、汗のない社会は墮落である」ということのようにですが、「汗のない社会は墮落である」というのは、どのような体験がもとにあるのでしょうか。

野中 大阪鉄道局で働いた時に、そう思いました。「汗流さんにとって、口だけ言うな」と。僕の給料が高すぎる、という人はようけおった。僕を対象に不服申請した奴がおる。

— 最後に、ご本に「地方行政にかかわった経験が、政治家としての活動のもとになった」と書かれていますが、これについても、もう少し詳しく触れてくれますか。

野中 自治大臣の時もそうですが、官房長官のとき、北海道拓殖銀行と山一證券が倒れて金融不安になった。与謝野馨が通産大臣でした。僕のところに緊急特別融資対策をつくと決済を取りに来た。それまで中小企業の保証協会で金を貸していた保証料の代理弁済率は、国が100分の50と地方が100分の50だった。それを、国のを100分の75にする。地方に100分の25もってもらって緊急融資対策をする、と言ってきた。「ああ、そうか。君、いつからやる？」と尋ねたら、

「緊急にやります」と言う。そこで、言ってやった。「保証協会の必要費を出そうと思ったら、それぞれ都道府県と市町村の議会の議決がないとできないんだ。今からこんなことをやっていたら、来年の2月になる。金融不安は年末までにやらないといけない。もっとちゃんと考えて、やるなら来週からでもやれることを考えろ。それは国が100分の100を持つことだ。何の手続きもいらない。腹ひとつ決めたらいいことだ。地方にいささかの負担をさせたら、議会の手続きがあることを君は知らないだろう。地方自治を経験した俺が言う。大蔵省にそう言え」と。与謝野大臣が涌井主計局長のところに飛んで行って「年末までにやる」と言った。僕についている大蔵省の秘書官は「官房長官、それは困ります、違います」とわめいていた。「そんなもの、官房長官のところに来る時は、各省全部合議して自治省も了解して事務次官会議をやって全部できて、最後に官房長官がハンコを押すものだ。来週からできるか?」、「できません」、「そうだろう。持って帰れ。与謝野君、将来評価されるかどうかの試金石になる。やってみろ。だから君ね、『これでは官房長官が承知しない』と言って持って帰れ」。100分の100。最初20兆、あと10兆、一斉に。それこそ商工会議所も県の職員も市の職員も保証協会の窓口に行って、中小企業に1件5,000万円を無担保無保証で融資した。緊急にやったことで、あの金融不安を乗り越えることができたんですよ。

僕が地方自治を経験していなかったら、即断的に100分の25を持たすということになっていたと思う。そしたら、地方の議会の議決を必要とする。僕の経験が言わせた。それで、地方の保証協会なんか、1日で言われてきたこととコロッと変わってしまった。後で「本当にいいことをしてくれた」と喜んでくれたけど。私自身は地方自治の経験で、議会も金融危機も乗り切ることができたと思っています。

— 町長を2回されて府議になられますね。将来、国会議員にという気持は?

野中 それは全くない。蜷川に反対したから、選挙で。これ以上やっちゃうと。

— 蜷川さんと仲が悪くなったから、町長をやめられた、と。

野中 そう、蜷川さんと敵対することになったから。仲のいい、農林省から来た部長やった。浜田正という太っ腹な男で、何回でも中央に帰れる機会があったのに、彼がとうとう対抗馬に担ぎ出された。自民、公明、民社にね。彼と僕は仲がよかった。役場の前に選挙カーが来た時、僕は出て行って握手した。それが

らさっき言った税金の話になるわけです。

— 青年団運動をされていた昭和24年、国会議事堂に行かれて、国会議員になろうと思ったと本にも書かれています。

野中 ウソウソ。「ここへ来る予定だ」というのは、その本の著者の作り話です。

— 町会議員になって、町長になって、国会議員になるという気持ちはなかった、と？

野中 全くなかった。竹下さんの一言です。それで、昭和58年8月の補欠選挙に出た。谷垣さんも一緒だった。竹下さんが「お前ね、俺はお前が町長になった歳に県議員から衆議院に出た。だけど島根のような草深いところで経験したことを知っているのは、ここにはおらん。このままでは地方はだめになる。お前はな、ドサ回りが長い。歳はいってもお前がした経験は必ず生きる。高く評価する。だから出てきてくれ」と竹下さんが僕に言った。不思議なことに竹下さんの家の50メートル先が女房の家でね。そんなことやら、青年団を通しての関係やらで竹下さんとはいろんな縁があったわけです。

— わかりました。予定の時間がきましたので、ここで終わりにさせていただきます。お忙しい時に本当にありがとうございました。今日の貴重なお話は『園部町史』に使わせていただきたいし、私の研究にも生かしたいと存じます。その時にはまた連絡させていただきます。

野中 どうぞ、どうぞ。実践力で。

— ありがとうございました。

解説 野中広務の「園部時代」

庄 司 俊 作

1. インタビューの意図

野中広務氏にインタビューを行なうにいたった動機に関しては、依頼した手紙の中で次のように記した。

インタビューを申し出た趣旨を説明いたします。私は農村部を中心に地方の明治から今日までの歴史を明らかにする研究プランを持っています。町長や村長に焦点を当て、その思想と行動を通して、地方や農村の、時代の空気というものを浮かび上がらせるのです。対象とする時代は、①明治期、②1930年代、③1950年代後半～60年代前半、④現在の4つを予定しています。1930年代に関しては最近、例の「西原借款」で有名な西原亀三が郷里雲原村（現福知山市）の村長として取り組んだ農村改造と西原の思想・行動を小論に取りまとめました。

野中先生は首相も噂された日本を代表する大政治家。その先生に対し、昭和30年代の園部町長時代のお話をうかがうのは、名だたる落語家の名人に前座時代の話聞くようなもので逡巡いたしました。お手伝いしている『園部町史』の仕事にも関係がございますし、またこれを逃すと永久にお話をうかがう機会が失われるかもしれないと考え、勇を奮い起こしました。ご寛容のほどお願い申し上げます。

園部町長時代の先生に関心を抱く理由は3点ございます。第1に、野中町長は新憲法と戦後民主主義の歴史的所産であると私は捉えています。第2に、町長時代に町の財政の建て直しと、施設・インフラ整備および産業振興を軸とした積極的な町づくりにより園部町の基礎を作られました。第3に、以上の2点により、府議時代の一部を含め、先生は形成期の戦後保守政治を体現された存在だと見ています。私の関心は研究上のものに限られますが、地方や農村の時代の空気を浮かび上がらせるうえで先生ほど適当な方は他に見い出せません。

衆議院議員在職中際立ったアジア外交重視の姿勢、あるいはイラクへの自衛隊派遣をめぐって示された勇気ある行動、そして最近の憲法や平和、国政と地方政治との関係、果ては小泉政権に関するご発言をお聞きするにつけ、今日ますます希薄になった保守政治家の良心を見せつけられる感じがし、その原点に触れたいとの思いが募ってまいりました。

質問項目は別紙の通りでございます。まだ調査が十分ではありませんので、おうかがいすべき事項を落としていたり、細部にこだわって核心をはずした質問になっているかもしれません。適宜対応をお願いすることにし、また当日はこれ以外にも私の方で補足の質問をさせていただきたく存じます。

野中氏（以下呼称は省略）は長い自分の政治生活を「地方政治32年、国政20年」と振り返っている。政治家としてハイライトは、園部町長の後、京都府議・同副知事を経て国政の舞台に出、内閣官房長官や自民党幹事長等を務めた時代であっただろう。だが、インタビューでお聞きしたのは町議・町長になるまでの歩みと町長としての足跡に限られる（次頁年表参照）。50年を超える政治生活のうちの、時間の長さでは約15年、町議を経て町長に就任、町長を2期務めた後府議になるまでの、郷里を活動の舞台にした園部時代をカバーする。政治家野中広務にとって駆け出しの時代といえる。町議になるまでの前史を含め、この期間は、野中の精神形成の時期である同時に、ことに町長として行政に当たる姿勢には後に政治家として大成する要因になったと思われる野中らしさの片鱗もあらわれている。その点で、野中広務という政治家をとらえる鍵もこの時期に隠されているといえる。

町議や町長を務めていた時期の野中と園部町に関しては別に稿をまとめるが、インタビューでの発言を理解する参考になるように、町長時代の野中に関して解説を加える。

年表 野中広務略年譜

年	月	野中広務関係事項	園部町関係事項
1925	10	京都府船井郡園部町で父北郎、母信枝の長男として誕生	
	32	3 町立園部幼稚園卒園	
	38	3 町立園部第一尋常小学校卒業	
	43	3 旧制京都府立園部中学校（現園部高校）卒業	
		4 鉄道省（旧国鉄）大阪鉄道局採用	
	45	3 応召で陸軍護士第二二七五六部隊入隊	
		8 終戦とともに復員、大鉄局に復職	
	51	4 園部町議会議員（3期）	
	55	4	園部町設置（園部・川辺・摩気・西本梅合併）
		5 園部町議会副議長	
	57	4	役場庁舎完工
		5 園部町議会議長	
	58	11 園部町長（2期）	
		12	摩気・西本梅支所廃止
	59	1	財政自主再建計画の策定
		2	国道9号線一部開通
		8	8. 13水害により1億2千万円の被害を受ける
		9	台風15号により1億5千7百万円の被害を受ける
		10	園部郵便局庁舎移転新築完成
	60	3	財政再建2年早めて完了
		5	窓口事務を主とする事務改善スタート
		6	上水道事業知事認可
		7	西本梅地区に有線放送設備完成
		8	台風16号で2億5千万円の被害を受ける
	61	6	統合中学校建築起工
		10	7町共同でし尿処理場建設
	62	1	上水道工事着工
		4	営農モデル地域の指定を受ける
	63	1	全国優良町の表彰を受ける
		6 京都府町村会会長	
	64	5	統合幼稚園が完成
		6	町営第一プール完成、養鶏センター完成
		7	府立産業振興会館開館
		9	台風20号により8千万円の被害を受ける
	64	9	近郊都市整備地区に指定（近畿圏整備法）
	65	3	全町に有線放送設備が完成
		7 全国町村会副会長	
		8 政府税制調査会委員	
		12	町内4農協が合併
	66	3	府道園部・篠山線舗装完成
	67	4 京都府議会議員（3期）	
	77	7 自由民主党京都府連政調会長	
	78	10 京都府副知事（1期）	
	83	8 衆議院議員（旧京都二区補選－当選1回）	

出典) 海野謙二編『野中広務 素顔と軌跡』（文理閣，2002年），『1980年園部町統計書』より作成。

2. 方法としての野中町長

なぜ野中町長なのかといえば、理由は2つあって、1つは、野中が町議と町長を務めた昭和20年代後半から30年代にかけての時期がもっている歴史的な意味が大きい。この時期に「昭和の町村合併」により現在の園部町が生まれる。全国の多くの町村と同じく、深刻な財政問題を抱えての船出であった。間もなく高度経済成長が始まって園部町の地域社会も大きく変化し、町に対し町民の身近で多様な要求が噴出する。財政難を解決する一方、町民の要求に適切に応えて新生園部町の町づくりを行なうという課題を野中は負った。この時期、直面した課題と求められた対応は全国の町村ほぼ共通であったが、園部町はとりわけ深刻な財政難にあったにもかかわらず、町長に就任した野中はそれを速やかに克服し、積極的な町づくりを推進して顕著な実績をあげたことが特徴である。

もう1つの理由は、政治家としての野中の個性、つまり地方から育った政治家で、町長時代もきわめて有能な町長であったこと、そしてそうした自らの「地方体験」を政治生活の資産としてことのほか大事にしてその後の政治活動を行ない、今も郷里との結びつきを変えようとしないうその姿勢に注目するからである。自民党の政治家の1つのタイプは地方からのたたき上げである。野中はその典型である。野中が町長であったのは1955年体制成立直後の昭和30年代であったことも考え合わせれば、町長としての野中を研究することは、1955年体制下の自民党支配の構造やたたき上げ型の自民党政治家の実像を明らかにすることにもつながるのではないかと考える。

2点目に関しては後で詳しく述べることにして、1点目に関してもう少し敷衍して述べる。それは、町長時代の野中の考え方と行動を規定したであろう、制度あるいは歴史的条件に関してである。

戦後、新憲法体制の一環として地方制度が誕生する。市制・町村制による「明治地方自治制」は、地方自治を本旨とする戦後憲法にもとづいて改革され「戦後地方自治制」として生まれ変わった。①男女20歳の完全普通選挙、②知事公選制と府県の自治体化による行政機構の改革（府県は国の下部機関あるいは市町村の指導支配機関でなく、市町村と同列の自治体となる）、③市町村等が独立の法人として財政運営が可能となる財政制度の確立、④ナショナル・ミニマムを保証する財政調整制度の導入、が制度面から見た改革の柱である。一方、財政自主権の未確立がなお制度的な限界として残された。「それは、国庫支出金、地方債、そして機関委任事務

の3つの制度に集約的にあられ」、これにより国が地方自治体を支配する中央集権の体制が今日まで続くことになる(宮本憲一『日本の地方自治 その歴史と未来』自治体研究社、2005年、106頁以下)。

こうした中、国や府県の補助金等をいかに上手に取ってくるかが町村長の大事な仕事になったりする。そこで、一番手っ取り早い方法は有力な国家議員にパイプをもつことである。また、自治体の長として同列になったとはいえ、現実には公共事業等に対する補助金の配分において府県知事のもつ権力はかぎりなく大きい。国の資金で公共的な建築物を導入するとき、配下にある町村から順位をつけて配分することだって、知事がやろうと思えばできたのである。戦後の国と府県と町村との関係はこうしたいびつな構造になっていた。自民党政治の基盤である利益誘導型の政策、政治家の温床を生む制度の問題である。

以上が国や府県との関係において町村長のあり方が問われる問題だとすれば、住民との関係によって規定される町村長のあり方、あるいは住民間の社会関係を反映する町村長のあり方という問題もある。

私は「国家と農村」、「政府と農民」という視点から戦前の農村社会を研究してきたが、昭和恐慌期に開始される農山漁村経済更生運動の実態を見たことがきっかけで改めて気づかされたことがある。それは町村(行政村)のあり方が農村の経済と生活にとってきわめて重要な役割を果たすという、半ば常識といえる事実である。同運動は現在の村づくりの原点であり、また同運動により町村行政は大きく変化して農村住民の経済と生活にとって身近で重要な役割を果たす存在となった。同運動により町村の一体性が飛躍的に高まったことも重要な点である。運動における町村長の役割は大きかった。やや単純化すると、それまでの町村長は学校とか納税とかを無難にやっていたら務まった。それに対して、同運動を指導した町村長は河川や農道等の公共事業に積極的であり、農民の経済や生活の向上に腐心して産業組合の組合長になったりする「積極派」が目立つ。第一次大戦後の経済発展の中、町村に向けられた大正デモクラシーの農家経済・生活向上の要求の強まりがその歴史的背景にあった(拙著『近現代日本の農村』吉川弘文館、2003年、参照)。

このような町村の役割の増大は不可逆的なものであろう。戦後の改革を経て高度経済成長へと進むと、町村に対する住民の要求の水準と範囲は一段と高まりを見せ、多様化することになる。

野中が町長に就任した歴史的段階というのは、さしあたり以上のように理解して

おくことができる。

3. 野中町長の戦後性と「園部時代」

野中に関する重要な文献がこの間次々に出版された。野中自身も『私は闘う』（文芸春秋、1996年。以下自伝と略し、頁はたとえば自伝52と表記する。他も同様）、『老兵は死なず』（文芸春秋、2003年、以下回想録と略）等の自叙伝・回想録を出版した。これらは国政での活動が中心であるが、一部生い立ちや園部町長になるまでの歩みが記されている。海野謙二編『野中広務 素顔と軌跡』（文理閣、2002年、以下河野と略）は園部時代、蜷川府政との対決を中心とした京都政界での活動をかなり詳しく紹介した点に特徴があり、「国政と地方政治」と題する野中の対談も掲載されている。さらに昨年、私にとってやや衝撃的な本が出版された。魚住昭『野中広務 差別と権力』（講談社、2004年、以下魚住と略）である。これらの文献により野中の思想と政治姿勢、活動の軌跡はだいたいたどれる状況に、現在なっている。

私の関心に引きつけると、野中が弱冠33歳の若さで園部町長になったことがまず問題のポイントである。野中の生い立ちから町長になるまでの歩みに関しては、以上の文献の中でかなり明らかにされており、今回のインタビューにおいて野中が語ったこともそれらと多く重なる。以上の文献も参照しながら、野中町長誕生の歴史的意味について考察したい。

野中の生家は「4反あまりの田んぼを有する自作農」（回想録361）である。しかも、魚住氏の著書が公然とテーマに掲げたように被差別部落に生まれた。戦前であれば、野中のような人物は本人がいかにも有能であっても、町村長になることはまずありえなかった。事実、園部町においても、野中が町長になるまでは、郵便局長とかの資産家である地元名士が町長を務めてきたという。この点で野中町長の誕生はすぐれて戦後的な現象といわなければならない。

魚住氏は、野中の町長時代に町会議長に就任して「野中の番頭」といわれたという人物の証言として、野中の町長就任は「ある種の革命やった」と記している（魚住77）。革命というのは語弊があって大げさすぎるが、大きな政治的事件であったことは確かである。野中自身も当時、自分が町会議長や町長になる政治的意味を自覚していた節がある。町長になる1年半前に町会議長に就任した際、「園部町政だより」（第1号）に就任挨拶を寄せ、そこで次のように記している。

私このたび議会の役職改選に伴い議長に就任いたしました。(中略)。勿論議会の議長という大任に価する何等のものを持ち合わせておりません。然し政治という上から考えますときに、私は大きな意義があったと考えています。それは従来の議会議長をやられた方々と年齢的にも財的にも、人間的にもその他あらゆる角度から考えても、完全に正反対に近い私というものが選任されたということです。即ち私は貧農に生まれ、現在も借家住いの安サラリーマンであり、年齢は議員中の最年少でありそれだけに非常に未熟愚才であります。従って従来の役職の方々とは、凡そ正反対の素地の中から私が選任されたということは、町政を形造る機関の1つである議会議員の考え方の中に新しい政治のあり方即ち貧困な恵まれない層の上に、政治というものの基礎がおかれたいえると考えてるのであります。

今回のインタビューで「生意気なことを書いた」と語ったが、これは、自分の議長就任は「貧困な恵まれない層」に政治の光をあてること、一部の恵まれた層のための町政から多数の「町民の側に立った町政」への転換につながるという、多分に若さゆえの気負いを含んだ野中の宣言であったと理解される。

では、なぜ野中は町長になることができたのか。戦後社会とはそういうもののだといえればそれまでだが、具体的な史実に即して考えてみよう。1つは、敗戦直後全国各地で青年団運動が盛り上がり、そのリーダーが「実力」を認められて町村長の地位に就くことが多いが、野中の場合もそうした事例の1つだといえよう。敗戦と戦後の改革により国と社会のあり方が大きく変化し、新たな時代を志向する青年層へ地域の主導性が移行した。もう1つは、野中個人のもつ高い能力である。野中は29歳で町議会副議長、次いで31歳で議長に就任する。1955年4月、旧園部町が摩気村・西本梅村と合併した絡みが背景にあると野中は答えたが、それにしても異常に速い。議長から町長選に打って出たときも、30名の町議のうち28名が野中陣営に付いたとされる。野中が町議仲間から広くかつ強い信頼を得ていたと考えなければ、理解しにくいことである。

ひとくちに能力といっても、町長も政治家であり、多様な能力が求められる。ここでは行政実務能力や物事に対する積極性・仕事熱心、真面目さという能力に注目する。野中は旧制園部中学卒業後旧国鉄の大阪鉄道管理局に入り約9年間、国鉄内の不正を防止し摘発する仕事などに従事した。「私は仕事が面白くてたまらなかつ

た。頭を使い、工夫をすればそれだけの結果が返ってくる」(回想録363)。仕事熱心で処理も迅速だった。当然上司の評価もきわめて良く、とんとん拍子に昇格昇給した。1951年に園部町議に当選した後も並行して1年ほど勤めた後、結局、ある事件がきっかけで退職することになる。

後で述べるが町長時代の野中の仕事ぶりを少し調べてみて、まず行政実務能力が非常に高く、物事に積極的で仕事熱心という印象をもった。これは鉄道で「サラリーマン」として働いた経験が大きいのではないかと考える。インタビューでそれを質問したことに対し、野中もそうだと肯定した。戦前においては、野中のように国鉄等で「サラリーマン」としてバリバリ働いた人間が村長や町長になるということは、これもほとんど全くなかったといえる。この点でも野中は典型的な戦後型の町長であった。

ここで先の魚住氏の著書にもどる。この本は野中の本格的な評伝であり、名うてのジャーナリストの著作だけに読み物として面白く、読者を飽きさせない。野中が被差別部落の出身であることにスポットを当て、「差別という重い十字架を背負いながら、半世紀にわたる権力闘争の修羅場をくぐりぬけてきた男」(魚住350)として描く。「平等を志向しながら、少数者を徹底して差別してきた」戦後社会。この戦後社会の「平等性と差別性という二重構造」の「はざまをよじ登り、ついには権力の中核にたどり着いた」政治家として野中の人生を描くのがモチーフである。私も興味深く読み、多くを学んだが多分に違和感が残ったのも事実である。

野中はインタビューでも大阪鉄道管理局時代に体験した自身の差別事件について語った。希望に燃えて仕事に打ち込んでいたとき、面倒を見た同郷の後輩の差別発言を聞いた。「5日間のたうちまわった」挙句、退職せざるをえなくなった苦しみはなかなか本人でないと理解しにくい。この悲しい怒りの経験が政治の道に入る背景にあったと語っているが(河野53, 回想録360)、うそではないだろう。町長、京都府議として重点をおいたのが同和对策問題であったということも本人の書いているとおりであろう。

だが、部落「差別という重い十字架を背負」って「権力闘争の修羅場をくぐりぬけてきた」というのが、ただ、権力を志向して一筋に突き進んできた、という意味であるとすれば、そのイメージは実態とずれているのではないかと思う。

先に触れたように優れた行政実務能力を備えていたことが野中町長の重要な特徴であった。これに情熱、胆力、雄弁による説得力等の資質が加わるが、これらが若

くして町長になり、後に政治家として大成する要因になったと考えられる。

野中の生家は普通の農家であり、父親は戦災孤児や近くに住んでいた朝鮮人の女性たちを親切に世話するなど他人に優しく、酒もタバコも呑まない善人だったという。方面委員にもなった。野中や弟妹は子守に雇った朝鮮人女性と遊んで育った。母親が教育熱心で、野中は村の子どもとしてはめずらしい公立の幼稚園に行き、長男であったが旧制園部中学に進学している。中等学校に進んだのは同級生約50人中8人だったという。普通の農家であるが、人が良く弱者に親切な父と教育熱心なしっかり者の母に大事に育てられた、田舎では上の部類に入る育ち方をした少年というイメージではないだろうか。野中少年は暗く落ち込んでいる感じがしない。

自叙伝等から受ける野中の人間的印象は、社会的な弱者に対する優しさがあふれた人物というものである。『私は闘う』のある解説で『『弱者に対する眼差し』が政治的エネルギーを生み、パワーに昇華していく過程が『私は闘う』でも随所に顔を出す』と記されている(自伝244, 文庫版)。同感である。インタビューにおいても、小学校の同窓会を開くにも幼稚園組とそうでない組は一緒にならないとやや困惑気味に述べているが、不平等ということに人一倍敏感であることがあらわれている。これは被差別部落の出身で、不当な差別の経験をしていることと関係があるかもしれないが、逆に、庶民やつらい体験をしている者が他人に優しいとは限らず、反対の場合も多いのであって、その点で野中の優しさというのはもっと根源的なものととらえるべきではなかろうか。

野中と部落差別とのかかわりでもう1つ注目されるのは、つらい不幸な経験をしたにもかかわらず、「部落を利権の温床にしたり、食べ物にする」ことは間違いであるという信念でやってきたと語っている点である。これは野中らしい受け止め方である。野中にとって部落問題とは運動家ではなく、あくまで政治家、統治者のそれであったといえる。教養とは調和のとれた人間の形成を意味するとされるが、この野中の姿勢は教養ある人間のそれである。

もとより部落問題の解決は野中にとって重要な課題であったが、若いときからもっと、幅があって大きな視野で考え行動する政治家だったのではないだろうか。以上がそう判断する理由である。

25歳の町議初当選から始まる30年余りの地方政治家としての経験と、戦争のときに感じた思いが、政治家としての原点であると野中は書いている(以下自伝による)。地方政治家としての経験が原点であるという意味の1つは、「地方政治家というの

は、その地方の本当の痛みや苦しさを知っている。その体験の中から、国会活動をし、政策を考える」ことが「政治家の条件」として必要だという考えにもとづいている。「人々と共に住み、苦しみや喜びを分かち合いながら、考えていく。そのことが一番大切だと私は思う」。野中は東京で生まれ育って地方の痛みを知らないような二世議員はあまり評価しないし苦手なようだ。

野中のいう「政治家の条件」は単なるきれいごとではない。野中自身、政治家は家族を自分の選挙区におくべきだとして、代議士になってからも東京には家も事務所も構えず、定期的に園部町の家に戻り、隣の喫茶店に行って支持者とのコミュニケーションを絶やさなかった。園部町の家は、「影の総理」（自伝文庫版の帯）とまでいわれた有力政治家の居宅としては意外に思うくらい近所でも目立たぬ佇まいである。また、政界引退後も、多くの自民党有力政治家と異なり、親族を後継者にすることはなかった。

野中のいう「政治家の条件」はいつの時代も、どの国においても、そして主義主張がいかにも異なるとも、政治家たらんとする者の、満たすべき普遍的な基本的要件である。そこで、魚住氏の本に立ち戻っていえば、政治家としての歩みを捉える上で野中が被差別部落の出身であることを誇大に描く一方、こうした政治家としての野中の思想と行動の重要な点を軽視あるいは無視し、結果としてその全体像を歪めているのではないかと思われる。

町議・町長として活躍した野中の「園部時代」の位置づけに関して述べた。郷里である園部の地は政治家として大成しても離れず、「人々とともに住み、苦しみや喜びを分かち合いながら、考えていく」土地であり、やがて訪れる終焉の地になるかもしれない。園部時代は野中の政治家として飛躍する原点の原点といえる。

4. 野中町長の素顔と足跡

園部町は1955年に旧園部町、摩気村、西本梅村の3町村が合併して誕生した。地理的に京都府のほぼ中央に位置し、口丹波の中心地である。国鉄山陰線により京都市とつながっていたが、当時はまだ交通は便利とはいえなかった。京都市に出るためには鉄道で1時間以上を要し、国道9号線は59年にやっと町内の一部が開通したということで祝賀パレードをやっているような時期であった。

55年現在、戸数は3,398戸、人口は1万5,664人である。山陰線沿いを中心に旧小出藩の城下町以来の町場が形成されていたが、全体としてまだ山間部の農村という

感じであり、就業者の産業別人口は農業が52%を占めた。山林約8割に対し耕地が約1割しかないため、農家は総じて零細であった。62年に興味深い農家の意向調査が実施されている。高度経済成長が始まり園部町も徐々に変化し始めたころである。その結果をみると、「農業だけで今後やっていく」という農家が21%、「農業を中心とした兼業で」が37%を占める一方、「兼業中心の農業で」という農家は42%であった。零細な農家が多かったにもかかわらず、野中町長の時代はまだ農家の営農意欲も高かったのである。

野中町長と園部町の政治や行政との関連をみる上で見落とせないもう1つの問題は、町内に複数の未解放部落が存在したこと、中でも木崎地区は、有力な土建業者が数多く存在しており、活発な同和運動を展開する一方、町議会にも戸数の割には多くの町議を送り出して、町の政治や行政に大きな影響力を及ぼしていたことである。そのこともあってか、町議会も野中が副議長になった頃は荒れることが多かったという。なお野中は同地区の出身ではない。

昭和30年代には、大水害が相次いで町を襲った。合併前の53年にも台風13号による水害を受けていた。これは全国的な現象で、戦争による国土の荒廃が背景にあった。加えて、財政制度が不十分だったこともあり、地方財政の危機が深刻化していたのが、55年前後の、とくに農村部を中心にした府県や町村の全国的な傾向であった。園部町も同様である。この点に関して、野中に関する文献では町費による「町幹部」の料亭での遊興乱脈がクローズアップされているが、もとよりそれは町が陥った財政難の主要要因ではない。町長に就任した野中がまず直面した課題が、町の財政立て直しであった。

57年町長が交代し野中も町議会議長になってすぐ「園部町政だより」が発刊された。一般の役場広報に相当するものであるが、内容が充実しており、町政や町の動きがよくわかる。野中の発案かと思ったが、「そうでない」ということなのでおそらく京都府の指導か何かに従ったものと考えられる。先に引用した「町民の側に立った町政」を主張した野中の文章は第1号に掲載されているが、それ以降も年初の号には町長、町議会議長の挨拶が載せられており、町政に当たる野中の姿勢や方針が分かる。これらに目を通して1つ気付いたことがある。町議会議長としての野中の挨拶は第1号と第5号に載せられている。それらを前町長の挨拶と比較すると、分量がおよそ2倍、中身も、前町長のお座なりな文章に引き換え、野中のは東西冷戦関連の国際情勢に触れたり、町政課題を踏まえ町の進むべき方向を具体的に提示す

るなど、なかなか迫力がある。どちらが町長か分からないが、インタビューでも野中が語った前町長の、名士町長ゆえの覇気のなさや、1年半ほどで町長が野中に交代したのも納得できる。第5号に載った野中議長の挨拶の出だしはこう書かれている。

1年365日として、人生は日数にして2万日余りであります。その永い人生航路を何の「くぎり」なしに旅をするとしたら、私達は何の変化もない旅路に倦怠を感じて堪えられないだろうと思います。1日に朝、晩の別があり1年に年末と正月という「くぎり」があることにより、私達は、その倦怠から救われているのだと考えるとき、正月は気分を改め蘇らせる転期としてやはり「おめでとう」と心から云えると存じます。そこで、私は「夜明け」の年であって欲しいと年の始めに心から期待するものであります。

福祉の増進を求めて合併をしたにもかかわらず、町は救いのない財政難に陥っており、町民は前途に希望を見い出せない状態にある。そこから抜け出す町づくりの一步を踏み出すことが求められているが、そのためには2つのことが必要である。1つは、「苦難の町造りは万難を排してもかくあるべしという何ものにも動じない」町長の決断、もう1つは、「府政とのつながりを密にして、府政につながる町政によって財政的にも、事業的にも八方塞の現状を打開」することである――。

以上が、野中の挨拶の趣旨である。野中町長の時代になって京都府との結びつきが急速に強くなることは後述するとして、ここから連想される町長時代の野中の人物像は、覇気と行動力があり、惰性と停滞を忌避し、信念で町政に当たる人物というイメージである。外回り等をするときは愛用のスクーターを利用した。自転車だとすぐ町民から呼び止めたりするからだとその理由を説明しているのが面白い。仕事熱心というのも鉄道時代と変わらなかったようだ。

当時、活発な運動を展開していた町内の同和団体に対する対応が課題であり、これを適切に押さえる人物が求められた。この点で町長の候補として名前が挙がった人物の中で野中以上の適任者がいなかったといわれる。野中が町長に推された理由の1つである。これに関連して、野中は町長2期目に京都府町村会長に就任していることが注目される。町村会長になると労働組合との交渉も行なわなければならないが、それを嫌がって他に為り手がない。これが、野中の語る、町村会長が彼に

回ってきた理由である。この種の交渉は鉄道時代に慣れていたというが、これも野中一流の胆力があつたから務まつたといえる。なお、町村会長というのは名誉職であり、政府の審議会等のメンバーに加えられたりするから「中央」との結びつきができる。野中も、65年に全国町村会副会長に就任すると同時に政府税制調査会の委員になる。これは「中央」への足がかりとなる。

町政に当たる姿勢とはいえば、とくに公平、公正な行政に心していたことがインタビューにおいて印象的であつた。同和地区に道路をつけるときに逆差別にならないように配慮したということや、各町議には任期中1つは手柄となる仕事を割り振ることに心がけたこと、そして役場の課長人事における僧職にある者の扱ひまで実に細かい気配りである。町の災害復旧工事の業者選定においても、それまでの有力業者が中心になって決めるやり方から、道具等をもって真っ先に駆けつけた業者が町のことを一番考えているということで、そこに回すようなやり方に変えたという。その結果、有力な業者とは対立関係になったと語っている。実態はどうだったのか、野中町政をとらえる上で、町の建設業者との関係は重要な研究課題である。

野中は、町議会議長のときに、岸内閣の郵政大臣に就任した田中角栄とつながりができている。京都府選出の前尾繁三郎とのつながりも強かつた。一方京都府との関係も、野中が町長になるとすぐに変化が起きる。野中が、従来の町の姿勢を改め、府とのつながりを強めることが町政の重要な課題と認識していたことは前述のとおりである。町長就任4か月後、蜷川京都府知事が園部町を訪れた。

「園部町政だより」(第9号)には、「異例の町行政視察に 正式来町はこれが始めて」との見出しでそのときの模様が大きく写真入りで報じられている。蜷川知事が祝典のついでに立ち寄ったことは過去何回かあつたが、「行政視察」という目的で直接園部町を訪ねるのは初めてであつた。そのとき、知事は、園部町は「産業振興の対策がおくれているようだが、最近は着実な振興策を樹てて意欲的に促進されつつあることは喜ばしい」と、野中町長による産業振興の強化を評価する挨拶をした。町からは「財政、上水道布設の援助、産業開発面5件、土木関係6件、るりけい公園施設等」の陳情が行なわれた。京都府と園部町の新たな関係の幕開けである。これ以降、野中は蜷川とは「小トラ」、「蜷川のプレーン」とか呼ばれるくらい強いつながりをもつことになる。

野中にとって、田中は「田舎の土の匂い、過疎地の感じをきちんとつかみ、理解してくれる人」(魚住95)であり、蜷川は、地方自治に情熱をもち、国の基準に合

わなくても、府独自にユニークな政策で町村を補助してくれる、アイディアに富む信頼できる知事であった。地方行政に当たる者には保守も革新もなかったと言う。リアリストとしての野中の面目が躍如としている。

「マージャンをすること」が補助金等を引き出す能力、有効な手段だったとは思えないが、人事交流ということで府から産業課長を受け入れたりしている。インタビューでも府の「管理職」とうまく付き合うことが鍵であるというニュアンスの発言を繰り返していることが注目される。知事個人というよりも、府の官僚機構が問題だということであろうか。こうした野中の能力は町長在任中町を取材してきた記者連中からも当時高い評価を得ていた（「広報そのべ」第52号、1962年9月）。

「今までは府政とあまりにも離れていた。蜷川府政と手をむすんで地方交付税や補助金をふやし、あらゆる面で町政を行政のルールにのせた」。「国や府からのあらゆる補助金のとってき方がうまい。（中略）よその町長にきくと、……何か特殊な才能を持っているのではないか、とさえいっている。（笑）」。「これだけ町政がややこしくなってくると、町長も今までのように、功なり名をとげたあとの名誉職といった、トコロテン式に押された町長ではいかんということだ。アマチュアではどうにもならんのではないか。ある程度プロ的でないと……。園部町も革新のようなムードをもちながら、それで上からもにらまれず、中央接渉もうまくやっている。町長の技術によって金もとれるのではないか、そういう気もする」。

町は1,800万円もの赤字をかかえ、財政運営上どうにもならない状態にあった。そこで、財政自主再建団体の指定を受け、57年度より財政再建に向け取り組みを始めたが、財政再建計画を2か年短縮、60年度に赤字を完全に解消した。一般に昭和30年代には経済発展により地方交付税や補助金が増大し町村は財政危機を脱却するが、国や府との強いつながりによってそれらをさらに増やした野中の働きが町の財政立て直しに大きく寄与したといえる。

国や府とのつながりは、一方で産業振興と社会資本の整備を中心に事業を積極的に進めることを可能にした。町民の側に立った施策、あるいは弱者に配慮した施策が目立つのが、具体的な事業からみた野中町政の第1の特徴である。不親切・不能率な「お役所仕事」を一新し、住民のための役場にするため、窓口事務の統一、相談室の新設、広報の充実、大福帳式台帳のカード化等を行なった。窓口事務の統一により、役場に来た町民は1か所で用事を済ますことができるようになる。国に先がけ、新入学生徒に教科書を無料配布するようにした理由には、弱者への配慮があっ

た。

高度経済成長が始まり、池田内閣の所得倍増計画が出されるに及んで、地方の農村部では、都市との格差が拡大し、繁栄の影に独り困窮に取り残されるのではないかとむしろ事態を深刻に受け止めた。経済成長の恩恵がまだ地方に十分均てんしていなかったのである。61年1月に全国町村長大会が同趣旨の宣言を発表するが、それは当時農村部の町村のおかれた状況、いうなれば社会的弱者の意識、気分を強く反映していた。園部町も同様である。同宣言を「園部町政だより」(号外, 1961年2月)に掲載するとともに、野中町長も年頭の挨拶でこの問題に触れた。そこには、こう書かれている(「園部町政だより」第32号)

経済の成長は喜ばしいことですが、その谷間に落ちこんだ層、すなわち農民、中、小企業を抱えているのが私たちの町でありますので、今後この経済成長の犠牲を少しでも軽くするよう、私たちは政府にも府にも積極的に取り組むとともに、町政の中においてもこれに対処しなくてはならない。

野中の中では、経済成長により拡大する都市部との格差を少しでも埋めることが自ら進める町づくりの任務と意識していたということであろうか。

野中町政を特徴づける第2のキーワードは、行政の積極性である。生活改善を目的とした上水道整備や、新農村建設事業や府下唯一の営農改善モデル事業等による農業振興、工場誘致や街灯設置等の商工業振興、道路や災害復旧による河川・橋の改良、懸案だった統合中学校の建築等の土木事業。インタビューでも触れている、共同処理施設「船井郡衛生管理組合」設置によるし尿の共同収集業務を始めたことも重要である。これは全国でももっとも早く開始された。

第3に、強い開発志向も野中町政の重要な特徴であった。町をとりまく開発計画は数多く樹立されたが、その中で最大の計画が、65年、近畿整備法にもとづき近郊都市整備区域に指定されたことである。これにより国鉄京都-園部間の複線電化をはじめとして、国道、府・町道の主要線の改良整備等が計画実行され、住宅開発と工場誘致のための基盤整備が図られた。

町の財政をみると、以上を反映して、産業振興費や土木費の割合が非常に多かった。また、投資的経費と人件費・物件費等の消費的経費に分けて歳出の内訳をみると、たとえば63年度では前者は52%にものぼる。住民1人当たりの金額で比較する

と、府下町村の平均の約2倍の水準にあった。投資的経費は後に住民の利益となって還元される経費であり、その多寡は町村の行政水準を測る基準である。

以上を総合すると、野中は町村の経営者としてきわめて有能な町長であったといえる。信念とした住民の「くらし」と「しあわせ」を守る行政ということも、積極的な町づくりにつとめるということも言葉だけではなかった。これは鉄道で「サラリーマン」として働いた経験が大きかったことについては先に触れた。この行政実務能力の高さは後に京都府副知事として発揮されるし、次いで国政に出て政治家として大成する重要な条件になったといえる。野中が「政治家の条件」として地方政治家の経験をあげるもう1つの意味として、それにより行政実務能力、広い意味で統治能力が身につくということがあった。このことも今回のインタビューで明らかになった重要な事実である。

おわりに

私が明らかにしようとしているのは、園部町長として活躍していた野中広務であり、その活動の舞台となった園部町という農村地域の社会と経済の構造である。野中という政治家の人物評価、それにはその全体像について正確な研究が不可欠であるが、それはいずれも私の関心外である。ただし、次の点は町長時代の野中の歴史的な位置づけにも関連することなので関説しておかなければならない。野中は今や利権誘導型政治家の代表格のようにいわれ、一部の極端な見方として克服されるべき政治家像の典型のように捉えられている。しかし、これは少し違うだろう。野中が信条としてきた「政治家の条件」、つまりわれわれの言葉でいえば、地域の人々の中から生まれ人々とともに歩む政治家、人々の痛みを理解しその要求を政治に反映させるという政治家の姿は、政治家としてのあり方ということでは普遍性がある。政治をめぐる制度の問題により、否定すべき政治的現実が生まれたことは否めない。とはいえ、「既得権益の打破」ということで、地域の人々の生活とか痛みとか現実に対するリアリティの乏しい政治家が次々に生まれる現状にも希望を見い出すことができない。政治の課題は、新たなタイプの、地域の人々から生まれ人々とともに歩む政治家の登場である。野中はけっして過去形の政治家ではない。未来につながる1つの指針を指し示す、その点で現在の日本では否おうなしに未来に生きる存在なのである。